

研究会	アジア地域統合研究試論（金曜セミナー）第2回
テーマ	「アジア太平洋運動史の構築」（梅森）、「アジア太平洋運動史の構築：当面の事業計画」（佐野）
報告者	梅森直之（政治学研究科教授）、佐野智規（GIARI フェロー）
日時	2007年11月2日（金）16時20分～18時
場所	早稲田大学19号館609教室
参加者	黒田一雄（アジア太平洋研究科教授）、勝間靖（同准教授）、各フェロー、院生など。

報告概要（梅森）：

一体化が進むアジア太平洋地域の歴史を、人と理念の移動とネットワークという視座から研究する拠点を設立する——「アジア太平洋運動史の構築」部会は、このような目的に向けて、「歴史」から、この COE プロジェクトに参加している。「アジア統合に向けた人材育成」は、非常に難しい課題だ。現状において歴史研究は、日本の歴史は日本史、中国の歴史は中国史、韓国ならば韓国史、と国家ごとの「縦割り」になっている。これに対して、歴史叙述を「地域統合する」こと、グローバル化した社会に対応し得るような新しいアジア太平洋地域の歴史パラダイムを考えることが、私たちの部会の目標である。

さて、その目標を実現するためにはどうしたらよいか。そのための方法論として、① recontextualization（脱文脈化）、② reconceptualization（再概念化）、③ rewriting（書き直し）の「3つのR」が考えられる。

①recontextualization とは、国という単位、国境という境界線をいちど脱文脈化する作業である。recontextualization を経た叙述は、アジア太平洋地域をひとつの全体性として問題化するような歴史叙述、そしてその間の相互関係を中心に考えて行くような歴史叙述であろう。

② reconceptualization とは、歴史を構成する様々な概念を構築し直すこと、特に時間と空間に関するそれを批判的に再構築する作業である。なぜこのような作業が必要なのか。それは、「近代化理論」の誘惑から身を離すためである。たとえば日本政治思想史研究者である丸山真男の仕事は、日本社会の歴史を描き、日本社会の特徴を析出することだったが、その分析は西洋と日本との対比、つまり西洋との差異を問題化することによって遂行された。彼の仕事にみられるように、日本における「近代化理論」の政治的戦略とは、西洋／オリエントというオリエンタリズムの認識枠組を西洋／日本へとずらし、そこから進んだ西洋と遅れた日本という言説を導出することで、日本をこれからより近代化・より市民社会化・より民主化するためにはどうしたらよいかという問題を提起する。しかし、近代化理論——「戦後民主主義」と言って良いだろう——に抗するために、批判の対象を称揚の対象として裏返すことも、また問題である。近代化理論においては批判の対象であった諸要素を「それこそが日本の特徴であり美徳である」と語りなおすこのような戦後民主主義

批判論は、結局のところ西洋／日本という二元的な対立の枠組みをいまだ堅持している。つまりこれはオクシデンタリズムなのだ。近代化理論のパラダイムの先を展望するためには、パラダイムそのものを reconceptualize する必要があるだろう。では、どのように reconceptualize したらよいのだろうか。近代化論の認識論的なトリックは、空間的な差異を時間的な差異に変換する点にあった。つまり実際には西洋／日本の差異は空間的ものでしかなく、同じ歴史の時間の等しい時間を生きているのである。一国史を越えた歴史を叙述するためには、このような共時性・同時性を歴史叙述に組み込むことが必要だ。

③rewriting であるが、国際的な連帯あるいは地域統合について、社会運動の歴史的・超域的な相関関係を考えてゆくのが私たちの部会の作業である。歴史を書き直すことは、過去を対象とする行為だが、同時に未来に向けた実践でもあると言えるだろう。

報告概要（佐野）：

「アジア太平洋運動史の構築」部会は当面、本学大学史史料センター所蔵の資料「旧日本社会党文書」のデータベース化の作業を行う。このデータベース化作業を通じて、歴史・記憶についての危機管理を担う人材を育成してゆく。

記録：佐野智規（GIARI アジア地域統合フェロー）

編集：高橋華生子（アジア太平洋研究科助手）